

ひめゆり平和祈念資料館

資料館だより



米兵に収容された場所にて。糸満市字照屋の水源地（ティラガー）近く。上原当美子証言員 2017年10月12日

第 60 号
2017.11.30

目 次

- ひめゆり平和祈念資料館 30人の証言員…………… 1
- 資料館トピックス…………… 6
 - 引率教師関連資料の寄託・寄贈について / 「ウチナージュニアスタディ事業」の平和学習 / 夏休み特別企画「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「平和講話」 / 教員向け講習会 / 「沖縄県博物館協会総会・春の研修会」に参加 / 三重大学・豊地小学校で「平和講話」を実施 / 「全国歴史民俗系博物館協議会」に参加 / 『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』刊行記念シンポジウムに出席 / 教員の「島尻地区10年研修」「糸満市初任者研修」に協力 / 「マブニ・ピースプロジェクト沖縄2017総括シンポジウム」に出席 / 学習会「山城本部壕（サキアブ）で何を学ぶか」開催
- ひめゆり研究ノート⑭
 - ひめゆり学徒隊の引率教師たちとその時代（中）……………11
- ひめゆり研究ノート⑮
 - 「決戦防衛態勢」下の沖縄師範学校…………… 13
- 仲宗根政善日記抄（56）…………… 15
- 本棚（仲程昌徳）…………… 17
- 声…………… 18
- 資料館ガイド（利用案内）…………… 19

ひめゆり平和祈念資料館 30人の証言員

当館では、開館以来、元ひめゆり学徒が「証言員」として活動してきました。

証言員は、展示室で、あるいは戦争体験講話のなかで、多くの来館者に戦争体験を伝えてきました。来館者は、証言員の話聞き、沖縄戦のことを初めて知ったと驚き、戦争の悲惨さに言葉を詰まらせ、「戦争を起こしてはいけない」という気持ちを強くして下さっているようです。

証言員活動は、開館時 27 人からスタートし、のべ 30 人が活動しました。

『ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより』が、今号で 60 号の節目を迎えるのを機に、開館から現在までの証言員をご紹介します。

開館当初、50 代後半から 60 代だった証言員も、全員 90 代に差し掛かろうとしています。

活動を辞めた方、残念ながら亡くなってしまった方もいらっしゃいますが、現在も島袋淑子館長を含め、7 人の証言員が沖縄戦体験を伝え続けています。

※学年別五十音順

※「財団」とは「公益財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団」(旧・財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会)を指す。



いしかわ さちこ
石川幸子 Sachiko Ishikawa
1925 年西原町出身 旧姓玉那覇
沖縄戦当時 19 歳
沖縄師範学校女子部本科 2 年

教員だった両親の影響で、師範学校に進学した。小学 2 年で母を、師範 1 年で父を亡くし、その後、祖母と弟と 3 人暮らしだった。

沖縄戦中、第二外科に勤務。解散命令後、彷徨した後、伊原第三外科壕に隠れた。その壕でたくさんの学友が亡くなったことは知らなかった。多くの学友は 6 月下旬に収容されたが、幸子らはその後 2 か月間隠れ続け、8 月 22 日に米軍に投降。幸子はとても衰弱しており、髪の毛もほとんど抜け落ちていた。

戦後は教職に就く。物腰は柔らかいが、優しい中にもリーダーシップもある人だった。資料館建設中は、実物資料の整理に携わる。開館後証言員。1998-2011 年、財団事務局長。



いは そのこ
伊波園子 Sonoko Iha
1927 年名護市出身 旧姓比嘉
沖縄戦当時 18 歳
沖縄師範学校女子部本科 2 年

県立第三高等女学校から師範学校に進学した。

沖縄戦中は第二外科に勤務した。解散命令後、与那嶺松助先生や学友らと行動していたが、6 月 21 日、荒崎海岸に追いつめられ、米軍の自動小銃の乱射で足に重傷を負う。三高女から一緒に進学した屋良ヨシ、渡嘉敷良子、仲村末子は沖縄戦で亡くなった。

園子は重傷の上衰弱しており、回復には半年以上の時間を有した。1946 年 11 月から教職に就く。

資料館建設にも携わり、開館後証言員として活動した。戦場で怪我をした足が痛むようになり、1994 年に証言員を辞した。



おおみ さちこ
大見祥子 Sachiko Oomi
1925 年今帰仁村出身 旧姓久田
沖縄戦当時 19 歳
沖縄師範学校女子部本科 2 年

学生時代は、先輩たちに可愛がられ、ホームシックにもかからなかった。同郷の後輩たちの面倒見もよく、今でも慕われている。

沖縄戦中、第一外科兵器廠壕に勤務。南部撤退時背中に負傷。同じ弾で足を負傷した狩俣キヨは、重傷で壕から連れ出せなかった。解散命令後、追いつめられた喜屋武海岸で米兵を見かけ、学友らと自決しようとしたが、仲宗根政善先生の静止により思いとどまった。

戦後は幼稚園教諭を務める。退職後は趣味のフォークダンスを 30 年近く続けた。開館以来証言員を務め、「戦争が起こったらどういうことになるか知ったら、戦争をしたい人はいない」と、戦争の悲惨さを伝え続けてきたが、2015 年、体調を考え、証言員を辞した。



きな かずこ
喜納和子 Kazuko Kina
1927 年那覇市(首里)出身 旧姓屋宜
沖縄戦当時 19 歳
沖縄師範学校女子部本科 2 年

疎開を希望したが、学校からは疎開の許可がおりなかった。家族と疎開することを決め、沖縄戦直前の 3 月はじめ頃、大分県に疎開。4 月から私立城南高等女学校に勤めた。

1947 年、沖縄に帰ってきたとき、故郷のあまりの変わりようと、多くの学友が亡くなったことを知り、ショックを受けた。そのため、疎開をしたことに対して、負い目を感じ、戦後その思いを引きずってきた。

戦後は教職に就く。芯が強い中にも優しさをもった人だった。資料館建設に携わり、開館後 2011 年 2 月まで証言員。疎開先のことを話してほしいと学友から声をかけられたのが、資料館に携わるきっかけだった。2012 年 3 月 31 日逝去。



たいらひでよ
平良緋手代 Hideyo Taira
1924年那覇市(首里)出身 旧姓富川
沖縄戦当時 19歳
沖縄師範学校女子部本科2年

学生時代はブラスバンド部だった。とても明るい人だった。

寮生が沖縄陸軍病院に動員された後、首里に残っていた女師・一高女の生徒は男子師範に集められ、野田貞雄校長から北部への疎開を勧められた。緋手代は家族とともに北部に疎開した。

戦後は慰霊祭や資料館建設にも携わり、北部疎開の体験も証言している。開館後、証言員として活動したが、体調不良のため1994年に証言員を辞した。

2006年3月逝去。



とみむらとよこ
富村都代子 Toyoko Tomimura
1924年久米島町出身 旧姓宮城
沖縄戦当時 20歳
沖縄師範学校女子部本科2年

学生時代はスポーツ万能で、「短棒投げ」の記録保持者だった。物静かで落ちついていて自分の考えをしっかりと述べる人だった。家ではよく農作業の手伝いをしており、体が丈夫で健脚だった。

沖縄戦中、糸数分室に勤務。南部撤退後の6月17日、伊原第一外科壕が攻撃を受けた際、重傷の学友の世話や亡くなった学友の埋葬を行った。6月21日、荒崎海岸まで追いつめられ、攻撃を受ける。一緒に隠れていた学友には死傷者が出たが、都代子は無傷だった。

戦後は教職に就く。資料館建設に携わり、開館後証言員。実物部会などで活動。当初、第4展示室の遺影を見るのがつらかったと言うが、戦争体験を伝えるうちに、向き合うことができるようになったという。体調不良のため2009年に証言員を辞した。



ふくちひでこ
福治秀子 Hideko Fukuchi
1925年那覇市出身 旧姓平良
沖縄戦当時 19歳
沖縄師範学校女子部本科2年

1944年10月下旬、家族で大分県に疎開し、受入先の宮崎師範学校女子部に委託生として編入。1945年2月頃、宮崎の憲兵隊本部に動員され事務仕事を行う。3月の宮崎師範学校女子部での卒業の際、「委託生は沖縄師範学校から卒業証書をもらいなさい」と言われ、修了証書もらった。

1946年に八重山に転居し、登野城国民学校に勤める。

資料館建設時には、疎開体験を証言し記録に残した。開館後は証言員として活動したが、耳が遠くなったため、1994年に証言員を辞した。1990-1994年まで「相思樹会」(昭和20年当時の女師一高女在校生の会)の会長を務めた。



もとむらつる
本村つる Tsuru Motomura
1925年那覇市出身 旧姓佐久川
沖縄戦当時 19歳
沖縄師範学校女子部本科2年

1943年に師範本科に入学し寮生活となった。寮では、学業や増産作業、陣地構築など、厳しい生活だった。中でも、先輩や後輩との交流を温め、楽しい毎日だったという。

沖縄戦中、沖縄陸軍病院本部員として、伝令などに従事。解散命令後、西平英夫先生や学友らと行動した。彷徨中に重傷を負った下級生大舛清子を、大度海岸に残すという体験をしている。

戦後は教職に就く。資料館建設時には、期成会の資料委員長を務める。以後、財団事務局長や資料館副館長を歴任し、2002-2010年5代目館長。2009-2015年5月財団理事長。現在、財団理事・証言員。本村がいると周囲がパッと明るく楽しくなり、みんなに慕われている。



よかりょうとしこ
世嘉良利子 Toshiko Yokaryo
1925年那覇市出身 旧 喜舎場敏子
沖縄戦当時 19歳
沖縄師範学校女子部本科2年

学生時代は弓道部に所属し、全国大会の明治神宮大会に選手として出場したこともあった。

沖縄戦中は第一外科に勤務。解散命令後の6月19日、山城丘陵で負傷し、渡久山ヨシとともに残される。ヨシが23日に死亡した後移動し、26日、山城本部壕に入り、前野喜代と合流。その日のうちに米軍に収容される。

達筆で、資料館建設当時から事務の仕事を担当し、期成会資料委員会の副委員長も務めた。開館後は証言員として活動。真面目で誠実な人柄で、創作ダンスが得意だった。1999年頃から体調を崩し、証言員を辞した。2002年12月22日逝去。



あらかきせきこ
新垣世紀子 Sekiko Arakaki
1926年熊本県生まれ 旧 清原夕
沖縄戦当時 18歳
沖縄師範学校女子部本科1年

学生時代はバレーボール部だった。姉系子は女子師範、妹は一高女に通っていたため、毎朝3人で自宅のある与儀から安里まで軽便鉄道の線路に沿って歩いて通学した。

戦後は教職に就く。1944年夏頃、母と姉妹たちは母の郷里熊本へ疎開したが、父と姉系子と世紀子は沖縄に残った。1945年1月の空襲で寄宿舎が爆撃を受け、自宅から通学していたため、沖縄戦開始後も家族と行動していた。自宅で姉系子が被弾し死亡したため、5月頃学徒隊に合流し、糸数分室で勤務した。

戦後は教職に就く。資料館建設に携わり、開館後証言員を務める。体調が思わしくなく、宜野湾からの通勤が難しくなったため、2002年に証言員を辞した。



しろまかずこ
城間和子 Kazuko Shiroma
1927年那覇市出身 旧姓佐久川
沖縄戦当時 17歳
沖縄師範学校女子部本科1年

1944年、県立第二高等女学校から師範学校女子部本科に進学した。

沖縄戦中、第一外科に勤務した。妹の佐久川米子も師範学校女子部予科2年生で、ともに動員されたが、米子が4月26日に被弾。和子は妹の負傷を聞き駆けつけたが、すでに亡くなった後だった。米子はひめゆり学徒隊最初の犠牲者となった。

戦後は教職に就く。資料館を設立することを知り、手伝いたいと申し出て、建設に携わった。開館後も証言員として戦争体験を伝え続けてきた。証言員としての活動に誇りを持っていた。物おじせず、自分の考えをはっきりと述べる人だった。体調不良のため、2012年に証言員を辞した。2013年8月3日逝去。



つはこひさ
津波古ヒサ Hisa Tsuhako
1927年那覇市出身 旧姓岸本
沖縄戦当時 17歳
沖縄師範学校女子部本科1年

9人きょうだいの末っ子で、幼い頃はいつもお母さんの後を追っている甘えん坊だった。姉が一高女から師範の二部に入学したため、ヒサも当然の様に同じ進路を進んだ。学生時代は卓球部だった。学校の行き帰りに友達とおしゃべりするのがとても楽しかったという。

沖縄戦では第二外科に勤務し、治療班として軍医や看護婦について各壕を飛び回った。解散命令後、引率教師だった兄岸本幸安や西平英夫先生たちと行動し、6月23日米軍に収容される。収容後、嘉間良の孤児院に勤めた。

教員在職中は障がい児教育に力を注いだ。資料館建設に携わり、開館後から証言員。財団の理事や評議員を務めた。



てるやのぶこ
照屋信子 Nobuko Teruya
1926年久米島町出身 旧姓金城
沖縄戦当時 18歳
沖縄師範学校女子部本科1年

小学生の頃に教員を夢見て、久米島から師範学校に進学。学生時代はバレーボール部に所属していた。物静かな人だった。

沖縄戦中、第二外科に勤務した。解散命令後、同郷の富村都代子と合流したが、機銃を受けた際にはぐれる。6月21日、大城信子らとともに、荒崎海岸の岩穴に隠れていた。手榴弾で自決しようとする寸前、岩の外に与那嶺松助先生とそのグループが収容されるのを見て、自決を思いとどまり、米軍に収容される。

戦後は教職に就く。資料館建設に携わり、開館後も証言員を務めた。沖縄戦を伝えてきたが、体調不良のため2002年に証言員を辞した。



なかざとまさこ
仲里正子 Masako Nakazato
1927年石垣市出身 旧姓仲里
沖縄戦当時 17歳
沖縄師範学校女子部本科1年

ひとり娘で大事に育てられた。小学校時代、師範学校出身の先生方に教わり、将来は先生になりたいと思った。1941年、一高女に入学し、卒業後師範本科に入学。学生時代はテニス部だった。おとなしい性格ながら、負けず嫌いの一面もあった。

沖縄戦中、手術室に勤務し、手足の切断や開腹などの手術の補佐を行った。解散命令後、足に重傷を負い、彷徨した。多くの学友は6月下旬に収容されたが、正子は石川幸子や喜瀬芳子らと合流し、2か月間隠れ続ける。終戦を知らされ8月22日に投降した。

戦後は教職に就く。資料館建設時、実物資料の整理に携わり、開館後証言員。当初、戦争体験講話を行うことに躊躇していたが、皆に勧められ、講話を行うようになった。2013年から財団理事。



なかもとさちこ
仲本幸子 Sachiko Nakamoto
1926年中城村出身 旧姓仲真
沖縄戦当時 18歳
沖縄師範学校女子部本科1年

兄とふたりきょうだい。戦前、父はアルゼンチンにおり、母は疎開で、兄は陸軍幹部候補生として福岡に行っていたため、沖縄には幸子だけが残っていた。

沖縄戦中、第一外科に勤務。解散命令後、比嘉静枝、宮城フミと一緒に国頭突破を目指す。途中静枝とフミが被弾し死亡したため、幸子はひとりぼっちになった。さまよっているうちに、6月20日、喜屋武海岸で仲宗根政善先生のグループと合流。23日、近くに米兵が来たため、自決しようとしたが、仲宗根先生の静止で思いとどまった。

戦後は教職に就く。資料館建設に携わり、開館後、1994年まで証言員。2014年2月10日逝去。



ひがふみこ
比嘉文子 Fumiko Higa
1925年北大東村出身 旧姓伊波
沖縄戦当時 19歳
沖縄師範学校女子部本科1年

北大東島から教師を目指して師範学校に進学。入学試験時100m走が速かったためか、入学後、体育の先生に陸上部に入るように言われ入部した。本当はバレーボール部に入りたかったという。

沖縄戦中、本部員として勤務。南部撤退時には、砲弾の中、負傷した学友を担架に乗せて南部まで運んだ。解散命令後、海岸を彷徨中、負傷した大舩清子を、海岸に置いてくるという体験をした。

戦後は教職に就く。資料館建設に携わり、開館後証言員。資料館外での修学旅行生への講話なども行った。面倒見がよく、同期生のまとめ役でもあった。ひめゆり同窓会の次期副会長の任が決まり、その準備をしていたが、病気のため2010年1月29日逝去した。



まえのきよ
前野喜代 Kiyoko Maeno
1927年竹富村(竹富島)出身 旧姓古見
沖縄戦当時 17歳
沖縄師範学校女子部本科 1年

小学校の頃、夏休みに帰省する先輩たちが、各中等学校の紹介をするのに憧れ、先生になりたいと思うようになり、師範学校を志した。

沖縄戦直前、1945年1月22日の空襲で生き埋めになり、戦争の怖さを感じた。沖縄戦中は第一外科に勤務。解散命令後、顔に負傷し、逃げていたが、一緒だった同郷の学友らとはぐれ、6月19日からは山城本部壕に残された。世嘉良利子が合流し、6月26日に収容される。

戦後は郷里竹富島で教職に就く。退職後、石垣島で婦人会活動に携わり、戦争体験を話すこともあった。1999年に石垣から那覇に転居し、2001-2012年まで証言員。その後千葉県に移ったが、病気のため2016年11月9日逝去。



うえはらとみこ
上原当美子 Tomiko Uehara
1928年糸満市出身 旧姓上原
沖縄戦当時 17歳
沖縄師範学校女子部予科 3年

学生時代は野田真雄校長のおられる別寮で生活し、様々な薫陶を受けた。バレーボール部では後衛レギュラーで、明治神宮大会を目指していたが、戦争のため参加できず残念な思いをしたという。

沖縄戦中第一外科に勤務した。明るい性格から負傷兵たちを和ませていた。南部撤退後、衰弱していた古波蔵満子の世話をしたが、満子は伊原第一外科壕で被弾し死亡。解散命令後、重傷の渡久山ヨシを山城丘陵に残すという経験もしている。

戦後は教職に就く。資料館建設に携わり、開館後、証言員。写真部会として写真資料の整理を担った。活発で面倒見がよく、証言員仲間からも慕われている。館内外での戦争体験講話も積極的に行っていた。



じゃはな すみえ
謝花澄枝 Sumie Jahana
1927年南城市(玉城)出身 旧姓仲栄真
沖縄戦当時 17歳
沖縄師範学校女子部予科 3年

師範学校進学を断念した母の意向で、師範学校に進学した。バレー部だったが、レギュラーにはなれず、ボール拾いばかりしていた。家は農家だったので、食糧事情が悪くなった頃は、帰宅して食事するのがとても楽しみだったという。

沖縄戦中、糸数分室に勤務。負傷した県立第一中学校の学生が「君たちは本土の人ばかり世話をするのか」と怒っていたのが印象に残っているという。撤退後は伊原第一外科壕にいた。6月17日に壕に至近弾が落ちた際、死亡した学友の遺体埋葬を行った。

1989年から証言員を務める。病気で証言員活動を休んでいた時期もあったが克服し、現在も、来館者へ沖縄戦体験を伝えている。地域の活動にも積極的に参加している。



みやら るり
宮良ルリ Ruri Miyara
1926年石垣市出身 旧姓守下
沖縄戦当時 18歳
沖縄師範学校女子部本科 1年

小学校時代に、本を読みかかせてくれた女性教師に憧れ、教師を目指して石垣島から師範学校に進学した。

沖縄戦中、第三外科に勤務。6月19日、隠れていた伊原第三外科壕(ひめゆりの塔のガマ)が米軍の攻撃を受け、多くの学友、病院関係者が亡くなったが、奇跡的に生き残った。

郷里石垣島で教職に就き、生徒たちに沖縄戦の体験を伝えた。資料館建設時には、期成会資料委員会の副委員長。開館後、証言員としての活動に加え、県内外での講演活動も行い、精力的に沖縄戦を伝えた。学友たちの苦しむ様子を身を以て感じたため、「みんな生きたかった」と強く訴えてきた。2010-2011年資料館6代目館長。体調を崩し、2013年3月証言員を辞した。



しまぶくろ よしこ
島袋淑子 Yoshiko Shimabukuro
1928年本部町出身 旧姓屋比久
沖縄戦当時 17歳
沖縄師範学校女子部予科 3年

3人きょうだいの末っ子。入学当初は寄宿舎生活が寂しくいつも泣いていたが、次第に慣れ、楽しく過ごせるようになった。弓道部だった。

沖縄戦中、糸数分室に勤務し、16人の生徒で600人の患者の世話をした。撤退後の6月17日、伊原第一外科壕に至近弾が落ちた際、重傷を負った学友の世話をし、1つ先輩で仲の良かった荻堂ウタ子さんを看取った。解散命令後、右手右足に重傷を負い、戦後しばらくは右手を動かすことができなかった。

戦後は教職に就く。資料館建設に携わり、開館後証言員。県内外での講話活動も積極的に行った。2011年から7代目館長。朗らかで優しい人柄。沖縄戦を伝えるという気持ちはとても強く、現在館長として館を担い、証言員・職員のとよとなっている。



てるやまくこ
照屋菊子 Kikuko Teruya
1927年那覇市(首里)出身 旧姓宮城
沖縄戦当時 17歳
沖縄師範学校女子部予科 3年

言葉が丁寧で穏やかな真面目な人だった。十空襲後、宜野湾の祖母が体調を崩し、祖母宅から学校に通った。祖母ひとり残るのがしのびなく、家族や親戚の疎開に同行しなかった。1944年12月末、祖母が他界。沖縄戦中は祖母の位牌を持ち歩いていた。

沖縄戦中、第二外科に勤務。解散命令後、兵隊と学友数名と斬込隊に参加するが、砲爆撃を受け断念。6月20日、県立第二中学校の生徒に「女は殺さないよ。早まったことをしてはいけない」と諭され、米軍に収容される。

戦後は幼稚園に勤めた。資料館建設に携わり、開館後証言員。1998年頃体調を崩し入院した。学友が見舞ったときに、「もう一度資料館に行きたい」と言っていたが叶わなかった。1998年12月19日逝去。



ひがひで
比嘉秀 Hide Higa
1927年読谷村出身 旧姓比嘉
沖縄戦当時 17歳
沖縄師範学校女子部予科3年

沖縄戦中、第二外科に勤務。解散命令後、渡久山ハル、宮国節子と行動した。収容後、宜野座病院で、南風原に残した渡嘉敷良子に出会った。ハルと一緒に、置き去りにしたことを謝り、毎日見舞ったが、台風のため良子は死亡した。同じく宜野座に収容されていた与那嶺松助先生と秀とハルで埋葬した。

小学校の同期生だった新崎昌子に誘われ、証言員活動を始めた。読谷村楚辺からバスで片道3時間かけて通っていたが、体調不良で長距離を通うことが難しくなり、1996年に証言員を辞した。辞めた後も、孫たちに沖縄戦を伝えたいと、家族と一緒に資料館に来ることもあった。



みやぎのぶこ
宮城信子 Nobuko Miyagi
1927年北中城村出身 旧姓比嘉
沖縄戦当時 17歳
沖縄師範学校女子部予科2年

母と弟妹は疎開したが、信子は師範学校にいたので疎開できずと諦めていなかった。兄は兵役で台湾に行き、父と祖母は沖縄に残った。信子の動員後、心配した父が陸軍病院に会いに来たこともあった。

沖縄戦中、糸数分室に勤務。撤退後、伊原第一外科壕にいたが、6月17日近弾が落ち、学友たちが死傷した。同期生の伊波節子は足に重傷を負ったが、信子は無傷だった。解散命令後、同郷の先輩安里シズと行動し、6月21日に収容された。

戦後は教職に就く。明るく物事に動じない性格で、自分の意見を率直に言える人だった。資料館開館後、証言員を務めた。体調を崩して病院に行く途中にも証言員の当番のことを気にしていると、家族から関係者に連絡があった。2006年3月4日逝去。



おおしろのぶこ
大城信子 Nobuko Oshiro
1929年南風原町出身 旧姓城間
沖縄戦当時 16歳
沖縄県立第一高等女学校4年

姉2人が一高女生なので、一高女に進学を志した。学生時代は軽便鉄道で通学した。バレーボール部だった。姉の和子は、卒業後女師一高女の図書館に勤務していた。

沖縄戦中、第一外科に勤務。解散後、姉の和子、照屋信子と一緒に荒崎海岸で岩穴に隠れ、自決するつもりで日本兵から手榴弾をもらっていた。自決寸前、与那嶺松助先生や学友たちが収容されるのを見て、思いどまり、収容された。母は沖縄戦で亡くなった。

戦後は幼稚園に勤めた。証言員として活動する人を見て、「私も生き残ったんだからやらない」と、1992年から活動を始めた。クリスマスでいつも「感謝」の言葉を忘れない人だった。体調不良のため2012年度に証言員を辞した。2013年3月3日逝去。



よなはももこ
与那覇百子 Momoko Yonaha
1928年那覇市(首里)出身 旧姓上地
沖縄戦当時 17歳
沖縄師範学校女子部予科3

両親が教員になってほしいと希望したため、姉2人と百子は師範学校に進学した。ピアノを弾くのが好きで、よく器楽室でピアノを弾いていた。母と弟妹たちは県外に疎開したが、父と姉2人は沖縄戦で死亡した。

沖縄戦中、第一外科に勤務。同じ壕勤務の上地貞子が爆風によって無惨な姿になるのを目撃した。解散命令後、一緒に隠れていた日本兵に殺してもらうことになっていたが、その兵隊に急に壕を追い出され、米兵に収容された。その後日本兵らは自決した。

戦後、埼玉に転居し、関東一帯で沖縄戦の体験を伝える活動を行う。2006年に沖縄に戻り、証言員を務める。2008年に一度埼玉に戻るが、その後2012年から証言員。



あらかきまさこ
新崎昌子 Masako Arasaki
1928年読谷村出身 旧姓渡久山
沖縄戦当時 16歳
沖縄県立第一高等女学校4年

頼りがいがあり、後輩にも慕われていた。父がアメリカで仕事をしてきたため、いつかアメリカに行きたいと英語を一生懸命勉強したが、戦争のため、英語の授業は廃止された。沖縄戦直前の十七里行軍に参加した際、関節炎を患い1年間休学した。

沖縄戦中、第32軍司令部経理部に勤務。解散後、同じグループの先生や学友らとはぐれ、新里啓子と2人になった。先生たちを探しながら、8月22日まで隠れ続けた。戦後、親友の板良敷良子が荒崎海岸で自決したと宮城喜久子に知らされ、大きなショックを受けた。

戦後は教職に就く。資料館建設に携わり、開館以来証言員。遠く読谷村から通っている。証言員活動を生きがいと感じていて、多くの来館者に命の大切さを伝えている。財団の評議員も務めた。



しんざとひろこ
新里啓子 Hiroko Shinzato
1928年金武町出身 旧姓宜野座
沖縄戦当時 16歳
沖縄県立第一高等女学校4年

一高女生だった姉と寮では同室で、厳しく指導されることもあった。学生時代、歌が上手で、とても可愛らしかった。

沖縄戦中、第32軍司令部経理部に勤務。解散後、同じグループの先生や学友たちとはぐれ、新崎昌子と2人になった。途中手に負傷したが、満足に治療もできなかった。先生や学友を探しながら、8月22日まで隠れた。

資料館建設に携わり、開館後は証言員を務め、感想文集の編集作業に携わった。体調不良による療養のため、1994年に証言員を辞した。現在は、子や孫たちに戦争体験を伝えている。



ちねんよしこ
知念淑子 Yoshiko Chinen
1928年石垣市出身 旧姓仲吉
沖縄戦当時16歳
沖縄県立第一高等女学校4年

ブラスバンド部の部長、寮室の室長などを務めた。ブラスバンド部顧問だった東風平恵位先生に厳しく指導されたという。

1944年、女学校4年の夏休みに石垣島に帰省。帰校命令の電報が届いたが、一高女生の保護者が話しあった結果学校には戻らず、八重山陸軍気象部石垣島観測所に通信手として勤務した。

戦後は琉球銀行に勤め、結婚を機に退職。銀行勤務の経験を活かし、資料館建設時には経理事務を担当した。開館後も財団の経理担当。2011-2015年、財団事務局長。現在、財団理事。



みやぎきくこ
宮城喜久子 Kikuko Miyagi
1928年うるま市(勝連)出身 旧姓兼城
沖縄戦当時16歳
沖縄県立第一高等女学校4年

沖縄戦中、第32軍司令部経理部壕に勤務。解散命令後の6月21日、荒崎海岸に追いつめられ、引率教師の平良松四郎先生と学友らは手榴弾で自決した。喜久子は生き残った。

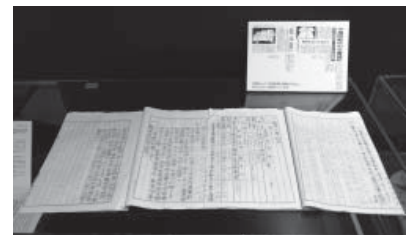
1972年、荒崎海岸を再訪した際、ゴミ捨て場になっていたことにショックを受け、沖縄戦を伝えることを決意し、荒崎海岸の散華の跡碑の建立にも尽力した。

資料館建設に携わり、開館後は、証言員としての活動に加え、県内外での講演活動も行い、精力的に沖縄戦を伝えた。いつも元気で颯爽としていた。2009年11月-2011年5月まで資料館副館長。次期館長として期待されていた。病気のため療養していたが、2014年12月31日逝去。

資料館トピックス

◆引率教師関連資料の寄贈・寄託について

2015年12月より2017年11月19日まで戦後70年特別展「ひめゆり学徒隊の引率教師たち」を開催いたしました。この展示会は引率された先生方のご家族が当館を訪れる機会にもなりました。来訪が契機となり、本年6月、沖縄師範学校長故野田貞雄先生のお孫さん野田謙二氏・野田英樹氏より、沖縄師範学校関連資料14点が寄託、沖縄師範学校女子部教授故玉代勢秀文先生ご子息田代和也氏より、玉代勢秀文先生の手紙等32点の資料が寄贈されました。



沖縄師範学校資料の一部

沖縄師範学校関連資料のうち「沖縄師範学校男子部」「沖縄師範学校女子部」は、1944(昭和19)年、沖縄戦直前の沖縄師範学校男子部・女子部の教育目標、国防訓練、食糧増産や勤労作業の状況が記されており、体験者の証言の裏付けとなる貴重なものとなっています。(この2点の詳細は13頁参照)玉代勢先生の史料は、奥様秀子さんが『ひめゆり教師の手紙』(1988,ニライ社)として書籍化した手紙の原本で、沖縄戦直前の沖縄や学校の様子がわかるとても重要な資料です。今後、保存・活用していきたいと考えています。



整理された玉代勢先生資料

◆「ウチナージュニアスタディ事業」の平和学習

8月2日、沖縄県知事公室交流推進課主催の「ウチナージュニアスタディ事業」の一環で、海外移住者の子弟など33人(海外16、県内17)が来館しました。当館では平和学習として、アニメ「ひめゆり」視聴、展示見学、ワークショップを行いました。10カ国の若者が集まり、ワークショップを通して、価値観を

共有したり、相互理解の重要さや平和の大切さなどを再確認する場になったようです。

ひめゆり学徒隊として亡くなった浜比嘉信子さんの親戚もブラジルから参加しました。新崎昌子証言員から信子さんの話を聞き、「今日の体験に感謝している。絶対に戦争を起こしてほしくない」と述べました。

◆夏休み特別企画「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」と「平和講話」

夏休み特別企画として「元ひめゆり学徒の戦争体験講話」（8月6・9・12日）と「平和講話」（8月13・14日）を開催しました。「戦争体験講話」は、2015年3月に原則終了しましたが、戦後70年を過ぎ、改めて体験者の話を聞きたいという要望が寄せられたため、今年も実施いたしました。2015年4月にスタートした職員による「平和講話」は、今回で3回目となります。

「戦争体験講話」は、島袋淑子館長、新崎昌子・仲里正子証言員が、「平和講話」は、尾鍋拓美説明員と前泊克美学芸員が行いました。「話が心の中にまっすぐに届きました」「一語一句しっかり心に刻んで代弁していけたら」という「体験講話」への感想や「職員の話と証言ビデオで分かりやすかった」「語り継ぐ必要性を感じた」という「平和講話」への感想もありました。

5回の講話で418人の参加があり、年代も小学生から80代までと幅広く、多くの方に生存者の思いやひめゆり学徒隊の体験を知って頂く機会となりました。



証言員の講話に耳を傾ける参加者

◆教員向け講習会

8月16日に「ひめゆり平和祈念資料館 教員向け講習会」を開催しました。教員12人（県外1人、県内11人）とその他2人の14人が参加し、新崎昌子証言員の戦争体験講話、展示ガイドツアー、ワークショップ、意見交流を行いました。意見交流では、事前学習で生徒にひめゆりに関する書籍からひとり名前を抜き出させ関心を持たせる、近くの戦跡を訪ねる、学習後新聞投稿をするなど、様々な平和学習実践紹介もありました。終了後「新崎さんの話を子どもたちに伝えたい」、「ワークショップを学校で活用したい」、「教員としての学びのある研修だった」といった感想がありました。



教員向け講習会の参加者

◆「沖縄県博物館協会総会・春の研修会」に参加

5月18日・19日に「平成29年度沖縄県博物館協会 総会・春の研修会」が開催され、諸見徳一総務課長が参加しました。

18日は「那覇の戦後復興を歩く」というテーマで、那覇市歴史博物館、国際通り、壺屋焼物博物館など、那覇市内の文化財や博物館などを那覇市文化財課職員の案内で視察しました。那覇の都会の歴史を感じる興味深い内容でした。19日は、若狭公民館で総会と研修会が開催されました。総会での宮里正子会長の挨拶を皮切りに、「文化財の修復・復元・活用」のテーマで研修会が行われ、那覇市歴史博物館外間政明氏、沖縄美ら島財団上江洲安亨氏、沖縄県立博物館・美術館の園原謙氏が各館の取り組みを紹介しました。巡見、総会、報告ともに非常に充実した内容でした。



巡見の様子

◆三重大学・豊地小学校で「平和講話」を実施

6月28・29日に、尾鍋拓美説明員が三重大学と松阪市立豊地小学校で「平和講話」を行いました。「平和講話」は原則として資料館のみで行いますが、三重大学からの依頼を受け、試験的に実施しました。

28日、三重大学の学生約30人を対象に、尾鍋がひめゆり学徒隊宮城喜久子さんの証言映像と写真を使用した講話を、同行した古賀徳子学芸員はワークショップを行いました。参加者からは「映像だけでなく直接伝えてくれる説明員の存在が重要だと感じた」「ワークショップは自分が何を感じたのかが整理され、ほかの人のいろいろな感想もわかり良かった」といった声が寄せられました。



三重大学での講話の様子

29日は松阪市立豊地小学校5、6年生70人余に講話を行いました。子どもたちはとても真剣に聞いていました。終了後「喜久子さんたちにはどうして嘘が教えられたのか」などの質問や感想があり、「喜久子さんから渡されたバトンを次へつないでいきたい」という頼もしい声もあがりました。

◆「全国歴史民俗系博物館協議会」に参加

7月13日・14日、「全国歴史民俗系博物館協議会 第6回年次集会」が九州国立博物館で開催され、諸見徳一総務課長が、加盟後初めて参加しました。歴民協登録館は全国784館で、今回は42館93人が出席しました。

13日の総会では29年度活動計画として加盟館ネットワーク充実と整備についてなどの決議と、次回の年次集会の近畿ブロックでの開催が決定しました。午後の研究集会では、「熊本地震と文化財レスキュー」と「博物館と地域振興」



九州国立博物館ミュージアムホールで開催

のテーマで計6件の報告があり、課題や取組が紹介されました。14日は九州歴史資料館の職員により、西鉄二日市駅、水城跡、太宰府政庁跡、観世音寺など大宰府の史跡の案内が行われました。

前週からの九州北部豪雨による災害や、今年の熊本大地震により被害を受けた文化財施設などへのレスキュー出動の最中での開催となり、幹事館関係者が対応に苦勞している様子が伺えました。

◆『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』刊行記念シンポジウムに出席

当館の普天間朝佳副館長、古賀徳子学芸員、仲田晃子説明員が執筆に参加した『沖縄県史 各論編6 沖縄戦』が3月に刊行されたのを機に、5月28日、刊行記念シンポジウム「『沖縄戦』を語る」(沖縄県教育委員会主催)が沖縄県立博物館・美術館で開催されました。来場者は約220人でした。

吉浜忍沖縄国際大学教授と林博史関東学院大学教授の基調講演で、吉浜教授から県史の内容が紹介され「新県史は、最新の研究成果だが終わりではない。研究を終わらせず続けてほしい」と提言がありました。林教授は、新県史がこれまでの

の沖縄戦研究の集大成であること、沖縄戦研究のこれからの担い手である中堅若手研究者が執筆したことに触れ、体験者からの聞き取りを県全体で組織的に行い共有できる仕組み作りの必要性を説かれました。

パネルディスカッションは、高良倉吉琉球大学名誉教授がコーディネーターを務め、吉浜教授、林教授、執筆者の名護市教育委員会川満彰さん、沖縄国際大学非常勤講師吉川由紀さん、当館の普天間副館長と古賀学芸員が登壇しました。各研究分野からの報告や問題提起等がなされ、活発な議論が行われました。



パネルディスカッション
(沖縄県教育庁文化財課史料編集班より提供)

◆教員の「島尻地区10年研修」「糸満市初任者研修」に協力

7月27日、沖縄県島尻地区の小中学校の中堅教員27人が参加する「島尻地区10年研修」に協力し、島袋淑子館長の戦争体験講話と職員による展示ガイドツアーを行いました。参加者代表から「国の未来を決めるのは教育。子どもたちや自分たちも、膨大な情報のなかで見極める力を持つことが大切だと感じた」と感想が述べられました。



島袋館長の体験を聞く10年研修の受講者



初任者研修でのワークショップ

8月10日の「糸満市初任者研修」には、糸満市内の小中学校教員13人が参加し「教員向け講習会」のプログラムを実施しました。研修を通してひめゆり学徒や沖縄戦について知り、自分の考えや意見を整理する機会になったようです。「館長の話で日常から戦争に引き込まれていったことを知った」「子どもたちを連れてきて心にひびく教育がしたい」という声が上がりました

◆「マブニ・ピースプロジェクト沖縄 2017 総括シンポジウム」に出席

8月27日に「マブニ・ピースプロジェクト沖縄 2017 総括シンポジウム 平和への思いをつなぐ～記録・記憶・アート新しいアプローチを求めて」(すでいる—Regenerationプロジェクト実行委員会主催)が、沖縄県立博物館・美術館で開催され、当館の普天間朝佳副館長がパネリストとして出席しました。



副館長による報告の様子

同実行委員会の仲村美奈子さんによる事業報告の後、パネルディスカッションが行われ、南風原文化センター平良次子さん、糸満市教育委員会加島由美子さん、美術作家で中学校教員上原秀樹さん、大学講師大城尚子さん、普天間が登場し、それぞれの現場の記録・記憶・アートの取り組みについて報告しました。参加者からは「私たち若い世代はどうやって記憶を残していくのかが問われていると感じました」などの感想が寄せられました。

◆学習会「山城本部壕（サキアブ）で何を学ぶか」開催

9月17日、学習会「山城本部壕（サキアブ）で何を学ぶか」が開催されました。修学旅行などを案内するガイド団体の沖縄平和ネットワークが山城本部壕への案内を検討しているため、沖縄県観光ボランティアガイド友の会と合同学習会を行う運びとなり、当館も協力することとなりました。山城本部壕は、地域住民から「サキアブ」と呼ばれており、南部撤退後に沖縄陸軍病院本部が置かれ、病院長など陸軍病院関係者のほか、ひめゆり学徒隊長西平英夫先生、本部員の学徒14人がこの壕に入りました。

学習会には24人が参加しました。多目的ホールで元ひめゆり学徒の本村つるが、本部員の活動や当時の山城本部壕の状況を説明し、現地では、当館の前泊克美学芸員が「ひめゆり学徒隊の山城本部壕での体験」を紹介しました。沖縄平和ネットワーク津多則光氏からは、ひめゆり学徒隊が入る前の「サキアブ」の状況や、山城一帯での軍による住民の壕追い出しの状況などが説明されました。



当時の状況を説明する本村つる証言員

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
ひめゆり研究ノート⑭
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

ひめゆり学徒隊の引率教師たちとその時代 (中)

※本稿は、ガイドの会と当館の合同学習会で報告した内容を文章化したものです。

2. 軍事化されていく「女師・一高女」

1941(昭和16)年4月以降:急速に軍事化されていく「女師・一高女」と教師たち

「女師・一高女」が急速に軍事化されていくのは1941(昭和16)年4月、西岡一義校長の着任後である。西岡校長は、生徒は常に引きしめておかないといけないという考えの持ち主であった。

「新校長は前任校でやって来た無遅刻無欠席運動というのをここでも実施した。生徒は教師が目をとどかせていないとなまけたり、ずる休みをしたりするものだ。だから常に生徒を引きしめておかないといけない。お尻をひっぱたけというわけである。校長はまた同じ発想によって教師も引きしめた」

(元女師・一高女教員・横井鹿之助)¹

そのような締めつけは西岡校長の個性にも強く影響されていたが、当時全国的に行われていた時代の潮流でもあった。生徒たちを締めつける(自由にできないようにする。圧迫する。束縛する²)ことは、軍事化を進める学校においては必要不可欠なものであったのだろう。西岡校長はまた、着任早々、職員会議を廃止する。

「校長が早々にしたことは職員会議をなくしたことであった。…その後の校長の言動をみていると、女師・一高女には自由主義、個人主義がび満ちていて、学校内はまとまりのない様相を示していると思ひ込んでいるようであった。自分がそれを立て直してやるという意気にもえていた。…職員会議が自由主義の根源だとも思っていたのだろうか」

(元女師・一高女教員・横井鹿之助)³。

同年12月8日、アジア太平洋戦争が開戦し、さらに学校の軍事化が進んでいった。同日昼、生徒たちは急ぎよ講堂に集められ、西岡校長から開戦の訓話を聞かされた。そして、戦意を高揚するためか、女師・一高女では、12月27日という年の瀬も押し詰まった日に、最上級生を対象に実弾

射撃訓練を行っている。射撃訓練は女学生にとってはかなりきつい訓練だったようだ⁴。

開戦後、教師たちは、「大東亜戦争」(アジア太平洋戦争)の聖戦としての意義を、生徒に教える役割を果たしている。

「抑々この聖戦は単に帝国の発展をのみ企図するものにあらず東亜の諸民族を英米百五十年の苛烈なる搾取より解放し我が肇国の精神に基づき各々その所を得しめ共存共栄の新秩序を確立するにある」

(仲宗根政善「東亜の指導者と女性」)⁵

「思うに米国の意図は英国その他と結んで東亜の新秩序建設を妨害し日支両国を戦わしめて米英の利益を擁護しようとするものである事は交渉を通じて明瞭である。…隠忍度あり、自重限りあり、A B C D諸国の反省を促すに平和的方法は効なきことが簡明になった。残るは一つ、彼等の頭上に鉄槌を下すことのみが彼等の頑冥を改めさせる唯一の方法である」

(元女師・一高女教員 日高傳「米国は東亜の新秩序を妨害」)⁶

“さめた目”を持っていた教師たち

そのような時代にあっても、当時の社会状況への“さめた目”を持っていた教師がわずかながらいた。彼らは、授業の中で当時の戦争政策への疑問を生徒たちに投げかけていたのである。

「島袋盛輝先生は黒板に精神、物量と書いて、君たちはどれを選ぶかと聞かれた。全員が精神と答えた。…先生は違う物量だ、大和魂があっても物量には勝てないとおっしゃった」

(ひめゆり学徒隊生存者・宮良ルリの証言)

「川村仁也先生は、授業の中で、自由主義、個人主義、人格の尊重などの話をしていて、自己を大切に、自己に忠実に、他人を手段に、犠牲にしてはいけない、他人のために自分が犠牲になってはいけないなどという話もしていた。当時国は兵隊を手段に、犠牲にしていたので、そのことを間接的に批判していたのだと思う」

(ひめゆり学徒隊生存者・津波古ヒサの証言)

そのような教師たちの多くは、20～30代の若い教師たちだった。彼らは、その言動から、学生時代に自由主義や個人主義、マルクス主義などの影響を受けていたことが推察される。その後彼らは、召集され、戦線へと送られていくことになる。

“さめた目”を持っていた教師たちの発言は、生徒たちの心に一定の波紋を投げかけることはあってもその考えを大きく変えるものにはならなかった。生徒たちは、当時の「聖戦」、「尽忠報国」、「鬼畜米英」というスローガンの下での戦争動員の大きなうねりの中に飲み込まれていたからである。

1944（昭和19）年：沖縄戦前夜の教師たち

女師・一高女の学校生活が劇的に変わるの、アメリカ軍の沖縄への侵攻が予想されるようになった1944（昭和19）年5月頃からであった。沖縄中を挙げてそれを迎え撃つ準備に追われるようになり、一般の住民や生徒たちまで、日本軍の飛行場づくりや陣地構築に駆り出されるようになったのである。女師・一高女でも授業時数を大幅に減らし、生徒たちを勤労奉仕作業へ動員するようになった。

同年10月10日、米軍による大空襲が沖縄を襲い、主要な日本軍施設が破壊されたほか、那覇市の90%以上が焼失するなど、大きな被害を受けた。この空襲以後、女師・一高女では疎開願いが続出する。勤労働員の重要な労働力であった生徒たちの疎開については、学校当局は消極的あるいは否定的であった。疎開を願い出る生徒に対し『『非国民』呼ばわり』をしたり、転校手続きをしないなど妨害したのである。

「〔昭和〕19年7月、疎開がはじまった時、父はいないし、幼い弟妹の多い私の家族は、早く疎開した方が良く、私はN先生に許可をお願いしました。ところが先生は『師範生は疎開させない』とおっしゃってどうしても許してくれません」

（当時師範女子部本科1年・与儀八重子）⁷

特に将来教員となる師範女子部の疎開に対しては「官費（奨学金）を全額返済せよ」「教員免許を与えない」と脅し、夏休みに帰省していた離島の生徒に対して「ただちに帰校せよ」という電報を打ち呼び戻している⁸。

沖縄師範学校の野田貞雄校長は、温厚で慈悲深

く教育者の鏡のような人柄であったが、当時、女子の疎開について下記のような厳しい意見を新聞紙上に寄せている。

「…戦局の逼迫と生産増強の要請によって第一線ならざる銃後諸機構からの男子の転出が多くなり当然それに代わって女子がその職域を護らねばならなくなってきた。…しかるに現状は有能の女子の県外疎開者もあり寒心に堪えない。特に自己身辺の事情を口実に逃げ出す女教員の多い事は慨嘆に堪えない。それで良いのか否断じて許すべからざる事だ。疎開該当者は強行に疎開させ、然らざる者はつきりと皇国護持の精神下に確保して戴きたい。…強力な統制が必要だ」⁹

野田校長は、沖縄戦直前の1945（昭和20）年1月に東京に出張に行き、危険な中を沖縄に帰ってきた。教職員が「帰ってこられなくてもよかったのでは」と言う「建物は壊れても再建することができますが、人の心は一度壊したら再建することはできません」と話していたそうである。そのような野田校長も、学徒の戦場動員という側面では、紛れもなく大きな役割を果たしたのである。同年3月末、米軍による沖縄上陸作戦が始まると、女師・一高女の教師18名¹⁰、生徒222名は沖縄陸軍病院に動員された。当時、戦争になったら軍に協力するのは当然のことだと考えられていたし、戦場になったらどういう事態になるか想像できる者は限られていた。生徒を引率した教師たちも多くの教え子を失う悲惨な事態が待ち受けているとは、想像だにしなかったのである。（61号につづく）

（学芸課 普天間朝佳）

- 1：横井鹿之助（元女師・一高女教員）『遠い昔』（県立第一高女昭和18年卒同期会発行）
- 2：岩波書店『広辞苑』第六版2008
- 3：横井・前掲書
- 4：『ひめゆり一女師・一高女沿革誌一』財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会1987
- 5・6：源武雄（元女師・一高女教員）『姫百合 第十六号』（女師・一高女校友会誌）1942
- 7：那覇市企画部市史編集室『那覇市史 資料編第2巻中の6』1975
- 8：『ひめゆり平和祈念資料館ガイドブック（展示・証言）』財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会
- 9：『沖縄新報』昭和20年2月27日2面
- 10：当時の在籍の男子教員は31名、そのうちひめゆり学徒隊引率が18人（師範鉄血勤皇隊引率野田貞雄校長も含む）、軍嘱託が1人（西岡一義部長）、召集5人、本土疎開2人、県内疎開3人、不明2人である（ひめゆり平和祈念資料館『戦後70年特別展 ひめゆり学徒隊の引率教師たち』2016）。



ひめゆり研究ノート⑮



「決戦防衛態勢」下の沖縄師範学校

1944(昭和19)年「沖縄師範学校男子部」「沖縄師範学校女子部」資料より

2017年6月23日慰霊の日に、沖縄師範学校校長で師範鉄血勤皇隊引率の野田貞雄氏のご遺族が、東京都の野田家に所蔵されていた沖縄師範学校関連の貴重な資料を持参した。その中の「沖縄師範学校男子部」「沖縄師範学校女子部」と表書きされた文書は、沖縄戦直前の1944(昭和19)年の沖縄師範学校男子部・女子部の教育目標、国防訓練、食糧増産作業、勤労働員作業の状況が分かる貴重な資料である。本稿ではその資料から見えてくることについて考えてみたい。

1943年「新制師範学校」発足と「教育二関スル戦時非常措置方策」への対応策

1943(昭和18)年4月、師範学校は新制師範へ移行し国立専門学校へ昇格、同年10月12日には「教育二関スル戦時非常措置方策」が閣議決定された。本資料は、それに対する沖縄師範学校男子部及び女子部の対応策をまとめたものである。したがって、本資料は、「第一 新制師範実施後の改善事項」と「第二 教育非常措置対策」の二つから構成されている。

「第一 新制師範実施後の改善事項」

「第一 新制師範実施後の改善事項」は「1. 最近三カ年の入学志願者状況(本科、予科、志願者数・入学者数)」、「2. 寮制度の拡張強化(寄宿舎生徒数、付記通学生徒数)」、「3. 修練組織」の三つの項目から構成されている。

男子部予科入学志願者は減少、本科は急増、女子部予科は微減

「1. 最近三カ年の入学志願者状況」では1942(昭和17)～1944(昭和19)年の師範学校の入学志願者状況について考察されている(文末の表を参照)。師範男子部予科の志願者数が減少傾向にあるが、募集人員の減少、少年航空兵志願等への転向などが原因と分析されている。逆に男子部本科の志願者が急増しているが、国立専門学校への昇格、学資給与の特典に加え、上級学校の文科学徒募集の減少による転向、交通上他県の学校受験

が困難などの要因があるとしている。女子部予科の志願者数は幾分減少しているが、男子のように顕著ではないとしている。

師範が全寮制になり寮室の確保に努める

「2. 寮制度の拡張強化」では、1943(昭和18)年より全寮制になり、入寮者が増加したため、寮室の確保に努めたことが記述されている。男子部では民間より4カ所を借用したが(2カ所は貸主の都合により返却)、それでも足りず、本科生は一部、予科生は全部通学生にしたと記述されている。女子部でも同窓会館の借用、修養道場の使用、既存の寮の改造、一高女生の入寮者の整理などを試み、1944年には師範在籍数に対する入寮者の割合は81.27%となったとしている。

男子部の修練目標は戦時即応の良兵教育、女子部の目標の記述はなし

「3. 修練組織」では、修練の目標として、男子部では(1)教育者として皇国の道の先達たるの資質を錬成す、(2)兵学一体の見地に立ち戦時即応の良兵教育を施して決戦防衛態勢を強化す、が挙げられている。どういうわけか女子部には目標が記述されていない。

男子部の修練内容が戦時即応態勢へ

男子部では修練の内容を、第1期(昭和18年度前半期)、第2期(昭和18年度後半期)、第3期(昭和19年度前半期)と時期ごとに分けて記述。修練項目として、第1期では軍人勅諭の謹解、柔・剣銃、空手の練習、行軍、不時防空訓練などが挙げられている。第2期ではそれに連隊区司令部への奉仕作業や軍関係工事作業が追加され、さらに第3期では、精神訓練特に戦意高揚の徹底に関する事項や国防訓練(滑空=グライダー訓練、自動車訓練、馬事訓練)の強化に関する事項が追加されている。修練の内容が戦時即応態勢になっていく様子が分かる。

食糧増産作業は新たな田畑の開墾や借用へ

食糧増産については、第1期では農繁期農村勤

労作業だったのに対し、第2期では農村への食糧増産奉仕作業の増加となり、さらに第3期では校有田畑だけでなく、新たな開墾や借用によって増産を拡大しようと試みていることがわかる。

女子部の修練内容も戦時即応態勢へ

女子部の修練としては、昭和18年度は、漢文補修班や先哲古典研究班といった、いわゆる学問的な要素の内容が入っていたが、昭和19年度からはそれらが消えている。また、心身鍛練についてもそれまでの国防訓練、合同体操、閱兵分列行進、競技練習、手旗練習、水泳などに加え、新たに乳幼児の保育、国民衛生に関する研修、戦時救護に関する研修、学校防護団訓練、救急看護訓練など戦時即応体制的な内容が加わっている。

「第二 教育非常措置対策」

「第二 教育非常措置対策」は「1. 教育上に於ける特別施設」、「2. 食糧増産計画」、「3. 勤労作業の状況」の3つの項目から構成されている。

男子部では本格的な軍事教育や軍事訓練を実施

男子部の「1. 教育上に於ける特別施設」中の「二、国防に関する特別施設」には、「1. 軍事的基礎訓練の強化、教練時数の増加、2. 軍事科学（予科）、軍事学、兵器学（本科）の実施、3. 特技訓練、4. 戦技訓練（射撃幹部生の養成、銃剣術強化）、5. 防空訓練定時（月一定）又は臨時に実施（待避壕の他防空資材整備）、6. 健民保険策としての養護施設」といった項目が挙げられており、戦時即応態勢下で、本格的な軍事教育や軍事訓練が実施されていたことがわかる。「四、特技に於ける特別施設」中の「1. 滑空訓練や2. 機甲（自動車）訓練、3. 馬事訓練」の3つは、前述の「第一 新制師範実施後の改善事項」の修練内容とも重複するが、新たに「4. 通信訓練、5. 海洋訓練」の2つが追加され、戦時即応態勢が強化されたことがわかる。「五、厚生保健に関する施設」では、教育非常措置に伴う過労による生徒の保健の対策の必要性について記述されている。「2. 食糧増産計画」については、作物ごとの細かい増産目標高と努力事項が挙げられている。

昭和19年度の男子部動員日数と述べ動員人数は前年度の約126倍と約178倍

「3. 勤労作業の状況」については、勤労作業を「(一) 協力令によるもの」と「(二) 協力令によら

ざるもの」に分け、昭和18年度と19年度の日数、延人員、作業種別（軍施設工事か増産か）が一覧表にまとめられている（文末の表を参照）。「付表」ではさらに出動事例ごとに細かく記述されている（「付表」はスペースの都合で割愛）。

「付表」によると、出動期間は昭和18年12月2日～昭和19年6月15日となっている。1件の作業につき少ない時は1日、多い時は46日間出動している。人員は1件につき少ない時に100人、多い時には462人が出動している。作業種別は「軍作業」または「増産」となっている。協力場所は、軍作業はほとんどが「飛行場」、増産は「各市町村」となっている。

前述の「勤労作業の状況」の一覧表では、昭和19年度の勤労作業の期間が11月18日迄となっているが、「付表」では、6月15日までのものしかなく、6月20日以降は予定と記されている。それから推察すると、この資料が書かれたのは昭和19年6月15日ごろだと考えられる。昭和19年7月以降は陣地構築への動員が本格化するが、この資料ではその状況が反映されておらず、協力場所も「各陣地」ではなく「飛行場」しかでてこない。昭和18年度と19年度の動員状況（協力令によるものとよらざるもの合計）を比較すると、動員日数が約126倍、述べ動員人数が約178倍に増加している。

女子部には男子部と同じような詳細な勤労作業動員の記述はなく不明である。

※本稿では、資料に基づき元号で表記を行った。

(学芸課 普天間朝佳)

◎師範学校 入学倍率

学年/年度	師範男子部		師範女子部	
	予科	本科	予科	本科
1937(昭和17)	3.6	1.6	8.8	1.7
1938(昭和18)	3.9	2.2	8.8	1.7
1939(昭和19)	1.9	3.0	5.3	1.8

※本資料に掲載されている「入学志願者数及び入学者数」を元に入学倍率を割り出した。1937年度は「予科・本科」ではなく「師範本科第一部・師範本科第二部」という名称であった。

◎勤労作業の状況 (沖縄師範学校男子部)

(一) 協力令によるもの

内容/年度	軍施設工事		増産		備考
	日数	延人員	日数	延人員	
昭和18年度	12	3,601	2	572	
昭和19年度	131	21,600	3	1,032	11月18日迄

(二) 協力令によらざるもの

内容/年度	軍施設工事		増産		その他	
	日数	延人員	日数	延人員	日数	延人員
昭和18年度	31	1,838	38	2,180	4	200
昭和19年度	28	6,860	1	250		

仲宗根政善日記抄 (56)

〔1980年〕四月十七日(つづき)

六月二十二日の夜、われわれは、食糧のあるだけを出して、夕御飯をたき、この岩の上に車座になった。もう明日からは食糧もない。飲む水さえない。敵はじりじりせまっている。皆は沈黙がちであった。月も漸くかたむき、最後は自決の話になった。手榴弾は全員で三個しか持っていなかった。十三名が抱きあって、三個同時に栓をぬけば全員が必ず死ぬると誰かがいうと、皆は黙ってしまった。やがて一人去り二人去りして、車座はくずれ、阿旦のかげへと消えて行った。私も阿旦のかげに、とげのある枝葉を敷いて岩の上にあおむけになった。阿旦の葉ずれに月光に夜露が光っていた。命がもうここまでおいつめられていることをひしひしと感じ孤独感にたえかねた。この岩の上に誰にも知られずに朽ちて行く。絶望のどん底につきおとされた。疲労はもう極に達し、身動きするのさえ苦痛だった。

百合の咲き乱れている岩の上に立つと、あの伏していた場所が見えた。さらにすすむと二十三日、全員が車座になって、自決の体勢をとったところが見える。敵兵がすぐ目前にあらわれたとき、生徒たちは、阿旦のかげで小さくかたまり、福地キヨ子¹が鋭い眼をこちらにむけて、先生、もういいですかという。福地待て、栓を抜くのではない、待て、とどなりつけたので、やっと手榴弾をひっこめた。生徒たちはよく私のいうことを聞いてくれた。あの一瞬のことを思うと今もはっとする。十三名の命はやっと助かった。何という仕合せであったろうか。白百合の咲きこぼれている岩の上に立って、私は自分の胸をさすった。しかし、その十三名の中、山里美代子は、その後、戦病死した。

自決の体勢をとった位置からさらに、西へとすすむと、捕虜全員が集められた場所に出た。そこは喜屋武の岬でももっとも突出した地点である。捕虜が次第によせあつめられつつあったとき、兵隊が手榴弾で自決して、その肉塊が手もとにおちた。人相の悪い眼のするどい小がらな兵隊が、私の背中に銃をつきつけた。生徒は私によりすがっ

て服をぬがせた。憔悴しきって、骨と皮になっている私の裸姿を生徒たちは見かねて、面をふせたという。

私は自らの服を生徒に渡した。生徒はそれを大切に岩かげにかくしてくれた。

岩かげをのぞいて見ると、服はぼろぼろに朽ちて、ボタンばかりが残っていた。自らのたましいをひろうようにして、五つのボタンを大切にポケットにおさめた。この一帯にも白百合がいっぱい咲きこぼれている。

喜屋武断崖は一年も近くたったというのに、生々しい弾痕がしらじらしく残っていた。大海原には船影一つない。万骨の枯れた沖縄最南端の岩の上に、ただ一人立っている。波はひたひたと断崖の表にくだけている。死のような静寂の中に生きた一人の人間だけが立っていた。あの岩の上に平良松四郎氏が十名の生徒をつれて姿を消したのであった。彼らは、敵陣を突破出来ず、断崖の下におりてひっかえし、潮につかりながら、東へとすすんで、ついに六月二十一日に自決したのであった。

〔1980年〕四月十八日

宜野湾市に「普天間飛行場撤去及び基地公害(騒音)を追放する市民の会」が十七日に結成された。むしろおそきに失する。

沖国大に非常勤講師をつとめてからもう四年になる。講義中、爆音でたえず、講義を中断された。爆音をじっと眼をつぶって我慢しつづけている。それはただ耳を聳するばかりではない。神経をいらだたせる。この沖縄の美しい空を、人殺しの稽古のためにこうもかき乱されなければいけないのか。米軍の暴威をまざまざ感じさせられる。二十余万の生霊のうずもれている沖縄の地で、なぜいつまでもこのような悪魔のような爆音にじっと我慢していなければいけないのか。基地は、□□緊張を高めている。それによって沖縄が守られているなどということはまっかな嘘である。

せつかく授業をしているのに、いつもむしゃく

しゃしたいらだたいしい気持ちにさせられてたえられない。

ところが、講義を聞いている学生たちは、あたりまえのように、平気な顔をしている。いったい、鮭の顔に水みたような顔をされては、彼らのきり開こうという未来はどうなるのか不安でたまらない。基地があり、爆音があるのは当然ではない。いつももどかしい気持ちで、じっと爆音にたえながら学生の顔を見た。どうして立ち上ってくれないのだろうか。

ようやく市民の間からその声が出て来たのはうれしい。

かつて、日本学術会議の議長越地勇一先生を迎えて、沖国大の図書館で、沖縄特別委員会と、沖縄の科学者との会議を持ったことがあった。ちょうど会議は、しばしば爆音で中断された。私は立ち上って、沖縄特別委員の方々にこう訴えた。

九州大学に飛行機が落下したとき、学術会議では、大問題となり、米軍の飛行コースの変更を求めて、議場はわいた。私はその時たまたまオブザーバーとして列席して、じっと会場をみつめていた。一体あの後、あの決議はどうなったのか。日本学術会議は、会発足の原点に立ちかえるべきではないか。今われわれは、九大が受けたような被害を今も受けつづけている。委員の皆さまはこの爆音を聞いていただきたい。と失礼をかえりみず沖縄の現状を訴えた。会場からは拍手がわいた。

あれ以来、沖国大の上をわがもの顔に爆音を放ちつづけて米軍機にたまりかねている。

本土は、沖縄のいたみはすこしも感じてはない。

沖縄返還協定が成立して、佐藤総理とニクソン大統領がはばれしくホワイトハウスの玄関にあらわれた。あの佐藤総理の口から、後ほど記者クラブで、ニクソン大統領の口まねをして、沖縄に核があるかないかわからないところに核の効用があると平然と語られた。

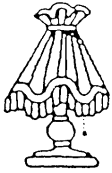
日米両政府は、今も沖縄に核があるかないかわからないと言いつづけている。本土には核がない

と、はっきり言いきれぬ。同じ国土でありながら、核に関して、何故、沖縄だけには核はないと断言しえないのか。それでよいのか。世の人々もこれを問題にしようとするまい。核へ開放されているのが沖縄である。非核三原則は、沖縄には、今も、及んでいない。

※読みやすさを考慮して、字句を補った箇所がある。旧字体は新字体へ変更し、明らかな誤字は改めた。

※□は判読不能。

※ 1：福地キヨ子。現入江キヨ。当時沖縄師範学校女子部本科2年。ひめゆり学徒隊としての動員ではなく、他部隊に協力していた。6月20日、喜屋武海岸で仲宗根や学友らと合流。23日に米軍に収容された。一緒に収容されたのは、大見祥子、吉村秀子、石垣美、仲本幸子、松田其枝、山里美代子、知念ヨシ子、上地弘子、宇良俊子、金城静子、末富文子、山内祐子。



本棚

仲程 昌徳

大田昌秀『久米島の「沖縄戦」』

大田昌秀は、実に多くの沖縄戦に関する著書を残している。その最初の著書から最後の著書まで通して見て行く仕事が、今後、必要になるだろうが、大きな見取り図を作っておくと、次のように四つの柱を立てることができるのではないかと思う。

1は『沖縄健児隊』(1953年6月5日)、2は『写真帳 これが沖縄戦だ』(1977年9月2日)、3は『大田昌秀が説く 沖縄戦の深層』(2014年8月15日)、4は『久米島の「沖縄戦」』(2016年4月30日)といった四つの柱であり、それを簡単にまとめてしまえば体験から記録へ、記録から検証へ、検証からあらためて地域の戦争へとといったようになるであろう。

もちろん、1には『沖縄のころ』(1972年8月21日)、2には『総史沖縄戦 写真記録』(1982年8月10日)、3には『沖縄一戦争と平和』(1982年4月29日)といった関連するいくつもの大切な著作があるわけで、それらを含めて見て行く事で、大田が体験し、考えてきた沖縄戦の全貌がくっきりとあらわれてくるかと思う。

『久米島の「沖縄戦」』は、大田の沖縄戦に関する最後の著作になったものであると同時に、全著作の最後に位置するものである。郷里・久米島の戦争を取り扱うことで全体を締め括ったともいえる大切な一冊であるが、大田が最後になって郷里の戦争を纏めたのは、しかし、単に郷里への思いが深かったということによるのではなかった。

大田は『沖縄のころ』の「おわりに一人間としての証しを求めて」で捕虜収容所での体験を記していた。ある日、大田は「何人かの沖縄青年たちが、一人の他県人を自分たちの幕舎内に連れ込んで、地べたに跪かせ」難詰している現場に出くわし、「二、三のものと一緒に止めに入った」のだが、「詰問しているわけを聞かされたとき、わたしは、沖縄戦のかくされた反面、というより実相をそこにみるおもいがして絶句せざるをえなかった」と書いていた。そこで難詰されていたのは鹿山兵曹長で、彼はその時「自らの所業を詫びて」いたにも関わらず、後になって、「その態度をかえ、「ひらきなおった」発言をしたため、事件を再燃させ」ることになる。

大田は、『久米島の「沖縄戦」』でも、鹿山兵曹長

を難詰している現場に自分が居合わせたこと、「事情をよく知らないまま暴力制裁を止めに入ったこと」について繰り返し触れていたが、「それを契機に私は、沖縄戦の研究に真剣に取り組むようになった」と書いていた。大田はまた同書の「はじめに」で、久米島高校で講演したとき「久米島事件について知っている生徒に挙手を求めたところ誰も挙手しないので、私はショックを受けた」ともいい、「改めて久米島事件についての詳細な本を書く必要を痛感せずにはおれませんでした」と書いていた。

『久米島の「沖縄戦」』は、そのような痛切な思いにかられて書かれたものであり、それは大田が言う通り「久米島事件についての詳細な本」になっている。事件に関わる証言の数々、残された日録、兵士たちの著書、日米の戦闘記録、ルポルタージュ、研究書といったように、集められる限りの関係資料を求め、書き上げたものであった。

久米島事件の全貌は、おそらくこれで明らかになったのではないかと思うが、大田がそこで強調していたのは、これまでも「沖縄戦の教訓として」繰り返して来た三点であった。それは1「沖縄戦の実態を手はじめに戦争の偽りのない姿をしっかりと把握することの重要性」、2「軍隊が戦争中に民衆を守るというのは、幻想にすぎないということ」、3「軍備によって国民、もしくは「自由主義、民主主義国家体制」を守ることは、沖縄戦に至るいわゆる「十五年戦争」の体験に即して言えば、不可能だと否定的にならざるを得ない」といった三点で、その中でもとりわけ2については、久米島事件で象徴的に顕現したことで、「とくに強調しておきたい」としていた。「沖縄の将来への方向づけは、なんどでも沖縄戦の原点に立ち戻って検証し、ねりなおす必要がある」というのは、『沖縄のころ』に出て来る大田の言葉である。大田は、まさしくその言葉通り、己の仕事をまっとうしてきたのである。

『久米島の「沖縄戦」』は、軍備の拡充、基地の拡張、自衛隊の各地への駐屯を恣にしているともいえる現状への危機感にうながされるようにして書き上げられた、大田昌秀の遺言書でもあるとっていいであろう。

声

もっと戦争について学び反対の声を上げていきたい

北海道 野中李樹

仲里先生へ

突然のお手紙失礼します。先日、アクティブ・スタディの卒業旅行にて先生にひめゆり学徒隊の話をお聞かせいただいた野中李樹と申します。本日はそのお礼を言いたくてお手紙を書かせて頂きました。

僕は太平洋戦争で沖縄が米軍に凄い攻撃を受けていた事は知っていましたが、女学生まで戦争の犠牲になっている事は詳しく知りませんでした。又、国の兵力が尽きて来ると学生も戦場へ連れて行かれましたが、男子ばかりで女子は医者の手伝い等をしていた事は知っていましたが、深くは知りませんでした。しかし、先生の話をお聞いていると、「知らなかった」で終わるものではなく、又、実際に体感したかのようなショックを受け、暗い気持ちになりました。

これから学校の先生になるんだと楽しみにしていた人が、戦争で台無しにされる、これ程悲しい事は無いと思いました。毎日怯えて過ごす日々、今では想像もつきません。何時死ぬか分からない恐怖に耐え、仕事をしていた人達は凄いと思います。

今、このような生活が出来るのも、多くの犠牲者が出て、日本中の人が反省したからだと思います。しかし、こんなに沢山の犠牲者が出る前に気付いてほしかったです。今も、世界では沢山の人が戦争で苦しんでいます。日本も何時同じような事になるか分かりません。だから、僕は今回の話を聞く事が出来て良かったと思います。先生の体験談から学んだ事を生かし、もっと戦争について学び、戦争反対の声を上げて行きたいと思います。

仲里先生、貴重な御話しを有難うございました。御体を大切にこれからもお元気で過ごして下さい。

資料館ガイド

◆多目的ホールご利用のご案内

当館ではひめゆり学徒隊や沖縄戦について学ぶための平和講話（約45分）、またはビデオ視聴を事前予約制で承っております。ご予約時間は以下のとおりです。お電話にて空き状況を確認後、FAXかメールにて申込書をお送り下さい。

【講話・ビデオ】9:00 10:00 11:00 12:00 13:00 14:00 15:00 16:00

※ビデオ作品 ○証言ビデオ「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」（25分／1994年）

○アニメ「ひめゆり」（30分／2012年）

※年末年始（12月30日、31日、1月1日～3日）・旧盆（旧暦7月13日～16日）は、講話は休みで、ビデオ視聴のみ受け付けます。慰霊祭前後（6月21日～24日）は、ビデオ上映会を行うため、予約はできません。

- 収容人員：約200人（席）
- 資料館へ入館していただく場合に限りさせていただきます。
- 多目的ホールは講話及びビデオ視聴以外の目的（セレモニー等）には利用できません。
- 予約時間に遅れた場合、予約状況によってはキャンセルさせて頂くこともございます。

◆VTR室のご利用について

証言ビデオ「平和への祈り—ひめゆり学徒の証言」とアニメ「ひめゆり」等映像作品を視聴することができます。詳細はお問い合わせ下さい。

◆資料館ご利用案内

①入館受付 午前9時～午後5時（閉館は午後5時25分） ②休館日 年中無休

③入館料 大人¥310 高校生¥210 小・中学生¥110

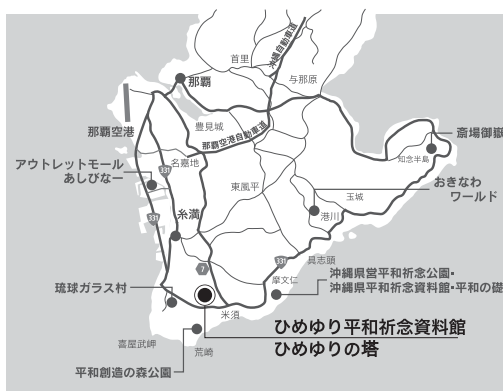
団体料金（20名以上）大人¥280 高校生¥190 小・中学生¥100

④交通

【バス】旭橋・那覇バスターミナルから〔89〕で約30分、糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え約15分、ひめゆりの塔前下車

【モノレール・バス】モノレール那覇空港駅から赤嶺駅まで約4分、赤嶺駅前（糸満・豊崎向け）バス停で〔89〕に乗車し約20分。糸満バスターミナルで〔82〕〔107〕〔108〕に乗り換え約15分、ひめゆりの塔前下車

【車】那覇空港より約30分



ひめゆり平和祈念資料館 資料館だより 第60号

2017（平成29）年11月30日発行

編集・発行 公益財団法人 沖縄県女師・一高女ひめゆり平和祈念財団立 ひめゆり平和祈念資料館

〒901-0344 沖縄県糸満市字伊原 671-1 ☎098-997-2100

URL <http://www.himeyuri.or.jp/> Facebook <https://www.facebook.com/HIMEYUIRI.PEACE.MUSEUM/>